

賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響

目白大学人間学部 笹川 智子
目白大学大学院心理学研究科 猪口 浩伸

【要 約】

本研究の目的は、他者から肯定的な評価を獲得しようとする「賞賛獲得欲求」と、他者からの否定的な評価を回避しようとする「拒否回避欲求」が対人不安に及ぼす影響を、Schlenker & Leary (1982) の自己呈示モデルの観点から検証することであった。都内の私立大学に在籍する学生207名を対象に、Social Phobia Scale, Social Interaction Anxiety Scale, および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度から構成される集団式の調査を実施した。その結果、拒否回避欲求と対人不安傾向は一貫して関連していたが、賞賛獲得欲求と対人不安傾向は互いに無相関であることが示された。このことから、Schlenker & Leary (1982) で論じられている自己呈示欲求は、良い印象を与えたいという方向性のものではなく、悪い印象を与えたくない、失敗を回避したいという欲求であることが推察された。最後に、今後の臨床場面への応用可能性が議論された。

キーワード：賞賛獲得欲求, 拒否回避欲求, 対人不安, 自己呈示

【問 題】

対人不安 (social anxiety) は、「現実の、あるいは想像上の対人場面において、他者からの評価に直面したり、もしくはそれを予測したりすることから生じる不安状態」と定義される (Schlenker & Leary, 1982, p.642; リアライ, 1990, p.4)。人は日常生活の中で絶えず互いを評価しあい、また自分自身が他人の目にどう映るかを監視している。このことには、適応上重要な意味があると考えられている。ある人への肯定的な評価は、多くの場合、肯定的な対人態度や友好的な関係行動をもたらす。結果として被評価者に直接的・間接的な利益を与える。反対に、否定的な評価は、評価者の否定的反応や関係の悪化・断絶につながるものであり、被評価者に潜在的な不利益をもたらす。こうした点を鑑みると、対人不安は、社会的場面に対する合理的な反応であると考えられる。

一方で、過剰な対人不安は社会的場面におけるパフォーマンスの低下や主観的不適応感、さ

らには生活上の困難を引き起こすことが知られている。DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000) における社交不安障害 (Social Anxiety Disorder: SAD) は、対人不安が極度に高まった状態であると理解できるが (Turner, Beidel, & Larkin, 1986), SAD患者の失業率は一般成人と比べて高く、最終学歴や既婚率、QOLが低いことが示されている (Davidson, Hughes, George, & Blazer, 1993; Safren, Heimberg, Brown, & Holle, 1997; Stein & Kean, 2000)。つまり、適度なレベルにおいては合理的であった社会的な場面における不安も、高じると対人関係の構築や学業・職業上の成功の妨げとなり、結果として生活の質の低下につながる。こうしたことから、対人不安をよりよく理解し、効果的な介入方法を確立しようという動きが国内外で広がっている。

対人不安の発生過程を社会心理学的立場から説明する理論として古くから影響力を持つものに、Schlenker & Leary (1982) の自己呈示理

論がある。自己呈示とは、他者が自分に対して抱く印象を操作しようとする試みのことを指す。例えば、相手から「育ちがよい」という印象を持たれたいために、子どもの頃親のしつけが厳しかった話をするというのは、自己呈示の試みである。人は、さまざまな自己呈示を繰り返しながら、自らの印象をよりよいものへと導くように動機づけられている。

対人不安の自己呈示理論では、対人不安の強さを「自己呈示への動機づけの強さ」と、「それが失敗するかもしれないと思う確率」との関数として表現する。典型的な例として、就職面接における不安の発生過程が挙げられる。面接に成功し、仕事を得るために、「有能な人と見られたい」という自己呈示欲求が生じる。しかし、この動機づけの存在だけでは対人不安が生じるための十分条件とはならない。「私はどう頑張っても有能な人には見られないだろう」という否定的な予測が加わった場合にのみ、不安が強まる。自己呈示に成功したいという動機づけが強まるほど、また動機づけが高まりながらも自己呈示に失敗するという見通しが強いほど、対人不安が高まると考えられる。

自己呈示欲求は2種類に大別されることが示されている(菅原, 1986)。1つは「賞賛獲得欲求」で、他者に肯定されたいという欲求を指す。もう1つは「拒否回避欲求」で、他者に否定されたくないという欲求を指す。これらの欲求は、いずれも対人不安の強さと関連するものとして概念化されてきた。Schlenker & Leary (1982) のモデルでは、「自己呈示をするように動機づけられている」状況下では、その欲求が賞賛獲得・拒否回避のいずれの欲求であっても、対人不安を強めることが予想される。

しかし、これまでの研究において、これらの欲求がいずれも対人不安を高めるものであるという見解は支持されていない。例えば菅原(1998)は、対人不安傾向は拒否回避欲求と $r = .23$ という正の相関があるが、賞賛獲得欲求とは $r = .08$ で、ほぼ無相関であることを報告している。また、佐々木・菅原・丹野(2001)は、賞賛獲得欲求と対人不安の間に $r = -.29$ という負の相関を認めており、賞賛獲得欲求はむしろ対人不安の低さと関連することを示している。

この研究では、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の交互作用が見出され、賞賛獲得欲求が低く、拒否回避欲求が高い個人において、対人不安傾向が最も高くなることを報告している。

清水(2007)は同様の検討を「目上の相手との会話」、「あまり親しくない人との会話」、「初対面の人との会話」、「会話の停滞」といった対人場面別に行った。その結果、拒否回避欲求の高さはすべての場面において対人不安と関連することが示されたが、賞賛獲得欲求に関しては、場面によって違いが見られた。「目上の相手」と「会話の停滞」については、賞賛獲得欲求が高いほど、対人不安も高い傾向が見られたが、「初対面の人」では、賞賛獲得欲求が高いほど、対人不安は低い傾向が見られた。「あまり親しくない人」では、賞賛獲得欲求と対人不安の間に関連性は見出されなかった。このことについて、清水(2007)は、状況に応じて他人に与えたい印象が異なるため、影響性の方向や規模が異なったのではないかと考察している。

清水(2007)の研究では、231名と十分なサンプル数が確保されていたにもかかわらず、有意傾向($p < .10$)の解釈を積極的に行っているという限界があるため、この結果から賞賛獲得欲求と対人不安の間に明確な関連性があるという結論は導き難い。また、佐々木(2001)では自己呈示理論から想定される方向性とは逆の相関関係が賞賛獲得欲求と対人不安の間に見出されているが、その理由については明確にされていない。つまり、賞賛獲得欲求と対人不安の関連性に関しては、これまでの実証研究で一貫した結論が導けていない。そこで本研究では、先行研究の追試を行い、自己呈示欲求が対人不安に与える影響について検討することを目的とする。

【方法】

調査対象者：都内の私立大学に在籍する学生207名(男性60名、女性145名、無記入2名)を対象とした。平均年齢は19.80歳、SD = 1.23であった。

調査時期：調査時期は2009年7月下旬であった。

調査材料：

① Social Phobia Scale日本語版 (SPS; 金井・笹川・陳・鈴木・嶋田・坂野, 2004)

他者から観察される状況, 主として人前でのパフォーマンス状況に対する不安を測定する尺度として用いた。SPSは「他者から見られることに対する不安」の1因子, 20項目で構成されており, 「1. まったくあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答を求める。尺度作成時の α 係数は.91と報告されており, 信頼性と妥当性が使用に耐えうる水準にあることが確認されている。本研究における当該尺度の α 係数は.92であった。

② Social Interaction Anxiety Scale日本語版 (SIAS; 金井ら, 2004)

清水 (2007) では恣意的に選定した4場面のもと, 場面間の比較が行われていたが, 本研究では場面ごとの違いを検討するため, パフォーマンス場面での不安に特化したSPSとともに, 対人交流場面での不安を測定するSIAS日本語版を実施し, 結果を比較・検討した。SIASは「対人交流に対する不安」と「他者から見られることに対する不安」の2因子, 20項目で構成されており, 「1. まったくあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」の5件法で回答を求める。SPSと同様に, 高い信頼性と妥当性を有し, 尺度作成時の α 係数は.72~.92であったことが示されている。本研究においても, 金井ら (2004) と同じ2因子構造が検出され, α 係数は.66~.92であった。

③ 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島・太田・菅原, 2003; 菅原, 1986)

自己呈示欲求の強さと傾向を測定することを目的とし, 菅原 (1986) によって作成された9項目版と, それを小島ら (2003) が一部改変した18項目版を併用した。どちらの尺度も「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」の2因子で構成されており, 回答は「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で求める。菅原 (1986) の尺度に関する信頼性と妥当性の報告は行われていないが, 小島ら (2003) の尺度作成時の α 係数は賞賛獲得欲求因子が.83, 拒否回避欲求因子が.82であった。再テスト信頼性は $r = .72 \sim .76$ と報告されており, 併存的妥当性と構成概念妥当性を有することも確認されて

いる。本研究においても, 9項目版・18項目版ともに原版と同様の2因子構造が確認され, α 係数は9項目版で.80~.91, 18項目版で.85~.87であった。賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の因子間相関は9項目版で0.53, 18項目版で0.35であった。

手続き: 大学の講義終了時に調査票を一斉に配布し, その場で回収した。集団式調査の実施に際しては, データが統計的に処理され個人情報秘匿されること, 調査協力は任意であり, 個人の評価等には一切影響しないことを口頭および紙面で説明し, 同意を得られた者に対してのみ調査を実施した。

分析方法: 統計解析にはSPSS16.0版を使用した。各尺度の基本統計量を算出した後, 対人不安を測定する尺度と, 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の相関関係を検討した。その上で, 対象者を賞賛獲得欲求得点・拒否回避欲求得点の高低群に分類し, SPSおよびSIASの合計得点を特性値とする, 2 (賞賛獲得欲求高低) \times 2 (拒否回避欲求高低) の分散分析を実施した。なお, 高低群への割りつけは, 平均値を基準に行った。また, 使用尺度の影響性を検討するため, 菅原 (1986) の9項目版と小島ら (2003) の18項目版の尺度で割りつけを行った際の結果を比較した。

【結果】

SPS得点, SIAS得点, 賞賛獲得・拒否回避欲求尺度の各因子の平均値と標準偏差をTable 1に示した。先行研究 (金井ら, 2005; 小島ら, 2003) で報告されている値に比して, 本研究におけるサンプルはSIASの値が高く ($t(342) = -3.11, p < .001$), 賞賛獲得欲求の値が低いことが確認された (9項目版: $t(299) = 5.59, p < .001$, 18項目版: $t(369) = 3.80, p < .001$)。SPSと拒否回避欲求の値に関しては, 先行研究と同等の水準にあった。性差に関しては, 18項目版の拒否回避欲求についてのみ, 女性が男性よりも有意に高かった ($t(91) = -2.81, p < .01$)。

尺度間の相関係数をTable 2に示した。SPSとSIASは, ともに賞賛獲得欲求と有意な相関を示さず, 拒否回避欲求との間でのみ高い相関が見られた。9項目版と18項目版のそれぞれ

で、賞賛獲得欲求得点と拒否回避欲求得点を互いの制御変数として偏相関を求めた場合にも、こうした傾向は変わらなかった。拒否回避欲求得点—SPS得点では $r = .24 \sim .43$ 、拒否回避欲求得点—SIAS得点では $r = .27 \sim .50$ であったが、賞賛獲得欲求—SPS得点では $r = -.10 \sim .01$ 、賞賛獲得欲求—SIASでは $r = -.18 \sim -.06$ であった。

次に、佐々木ら（2001）の手続きにならって、賞賛獲得欲求得点の高低と、拒否回避欲求得点の高低を要因として2元配置の分散分析を行った。18項目版で群分けし、SPS得点を特性値とした際の賞賛獲得欲求の主効果は $F(1, 194) = .161$ ($p = .689, n.s.$)、拒否回避欲求の

主効果は $F(1, 194) = 19.90$ ($p < .001$)、および交互作用は $F(1, 194) = .638$ ($p = .425, n.s.$)であった（Figure 1）。SIAS得点を特性値とした時、賞賛獲得欲求の主効果は $F(1, 196) = 1.549$ ($p = .215, n.s.$)、拒否回避欲求の主効果は $F(1, 196) = 37.260$ ($p < .001$)、および交互作用は $F(1, 196) = .106$ ($p = .745, n.s.$)であった（Figure 2）。9項目版で群分けした際も、同様の結果が得られた。拒否回避欲求のSPSに対する主効果は $F(1, 195) = 5.50$ ($p < .05$)、SIASに対する主効果は $F(1, 198) = 11.80$ ($p < .01$)であった。賞賛獲得欲求の主効果、および交互作用は有意な水準に達しなかった。

Table 1
Mean values of the SPS, SIAS, and self-presentation scales

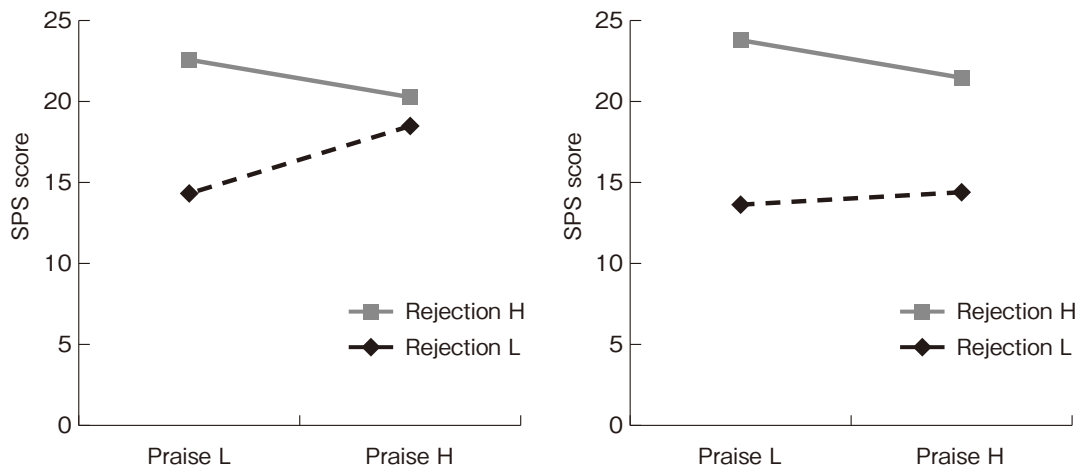
	Male n = 60	Female n = 145	Total n = 207
SPS	19.39 (16.10)	18.42 (13.73)	18.69 (14.36)
SIAS	34.33 (14.75)	33.67 (15.46)	33.84 (15.19)
Sugawara (1986)			
acquiring praise	13.98 (5.68)	14.70 (5.62)	14.49 (5.62)
avoiding rejection	13.20 (4.67)	14.35 (3.77)	14.01 (4.07)
Kojima et al. (2003)			
praise seeking	25.44 (6.89)	26.53 (6.92)	26.25 (6.92)
rejection avoidance	27.97 (8.75)	31.57 (7.07)	30.49 (7.74)

Note. Values in parentheses represent standard deviations.

Table 2
Correlation between SPS, SIAS, and self-presentation scales

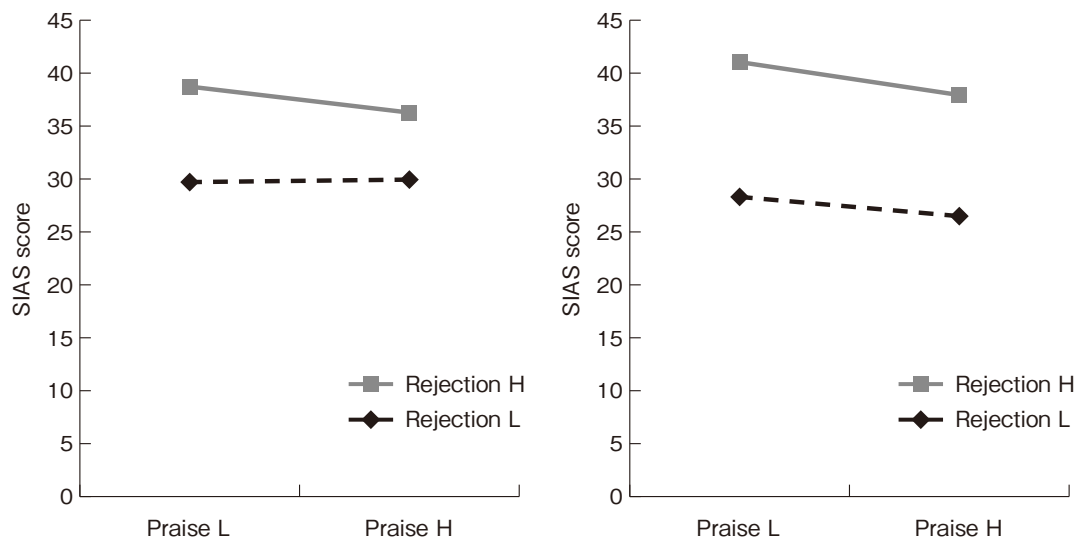
	SPS	SIAS
Sugawara (1986)		
acquiring praise	.13 †	.08
avoiding rejection	.27***	.28***
Kojima et al. (2003)		
praise seeking	.06	-.01
rejection avoidance	.43***	.47***

Note. *** $p < .01$, † $p < .10$



Note. Groupings based on Sugawara (1986) for the left graph and Kojima et al. (2003) for the right graph.

Figure 1. Effects of self-presentation on SPS score



Note. Groupings based on Sugawara (1986) for the left graph and Kojima et al. (2003) for the right graph.

Figure 2. Effects of self-presentation on SIAS score

【考 察】

相関分析の結果から、対人恐怖症傾向は拒否回避欲求と中程度の正の相関があることが示されたが、賞賛獲得欲求との間には有意な相関は示されなかった。同様の傾向が偏相関分析でも見出され、拒否回避欲求は賞賛獲得欲求の影響を取り除いた場合にも、対人恐怖症傾向と強い正の相関があることが示された。一方、賞賛獲得欲求は拒否回避欲求の影響を取り除いた場合にも、対人恐怖症傾向とは有意な相関関係に無いことが示された。分散分析では、拒否回避欲求の主効果のみ有意であり、賞賛獲得欲求の主効果や、両者の交互作用は認められなかった。これらの傾向は、SPSとSIASを用いて異なる対人不安場面を設定しても、賞賛獲得・拒否回避欲求の測定尺度を変えても、一貫していた。

対人不安は拒否回避欲求とのみ関連し、賞賛獲得欲求とは関連しないという本研究の結果は、臨床心理学的にも了解可能なものである。SADや対人恐怖症の患者の多くは、人よりも秀でているためであれ、人よりも劣っているためであれ、人目につき、否定的に評価されることを極端に恐れる。賞賛獲得欲求を満たす行動は、多くの場合人目につく行動でもあるため、対人不安の高い者にとっては、むしろ回避の対象となる。他方、人から悪く思われたい程度には、人並みの賞賛を獲得したい欲求が、対人不安者にもある。対人恐怖症の患者について、山下(1970)は「遠慮する気持ち」と「負けず嫌い」という言葉でそのアンビバレントな心情を表わしているが、本研究の結果はまさに「目立つほどには秀でたくないが、人から悪く思われるほど失敗をしたくもない」という対人恐怖症者の欲求を反映したものと理解できる。

先行研究の中には、賞賛獲得欲求と対人不安に一定の関係性を見出したものも存在した。この理由としては、第一に、使用尺度の問題が考えられる。例えば、菅原(1998)や佐々木ら(2001)の研究で使用された菅原(1986)の尺度と、本研究で併用した小島(2003)の尺度を比較すると、いずれを用いた際にも同じ傾向が示されたものの、小島ら(2003)の尺度の方が、明確な結果が導けた。加えて、佐々木ら(2001)では対人不安の尺度として、リアリイ

(1990)に掲載されている対人不安感尺度を使用している。この尺度はLeary(1983)の訳として多くの研究で使用されているものの、信頼性と妥当性については十分に検討されてこなかった。さらに、清水(2007)も対人不安の測定を独自に作成した尺度に頼っており、尺度の統計的な性質については十分な検討が行われていない。こうしたことから、測定尺度の不安定性が、結果に影響した可能性が否定できない。

さらに、賞賛獲得欲求と対人不安の間に唯一直線的な相関関係を見出した清水(2007)の研究では、有意傾向を積極的に解釈していた。Table 2の通り、本研究においても、項目数が少なく測定が不安定な9項目版の賞賛獲得・拒否回避尺度を用いると、賞賛獲得欲求とSPSの相関は有意傾向を示す。相関係数の低さから、この傾向は意味のあるものではなく、サンプル数が大きいことに起因するものと解釈することが妥当であろう。本研究では検出されなかった場面による違いが見られたことに関しても、今後精度の高い測度を用いて、更に検討する必要があるだろう。

第二に、これまでに行われてきた研究がいずれも自己評定によるものであることが挙げられる。「人から良く思われたい」という考えは、社会的望ましさの影響を受ける可能性が考えられる。今回のサンプルは、先行研究と比較して賞賛獲得欲求が低い集団であったことから、どの程度賞賛獲得欲求を自覚しているか、自覚している場合、正直に答えるかという点で、研究間の不一致が生じた可能性が指摘できる。こうした点を鑑みると、今後は自己評定以外の行動評定等を併用することで、当該の人物がどの程度人から肯定的な評価を得たいと感じているのかを客観的に評価する必要があるだろう。

本研究の結果から、臨床場面で遭遇するSAD患者は、総じて「人から悪く思われたくない」という動機づけを持って来談することが示唆された。人前でうまくやりたい、成功したいというような積極的な動機づけよりも、単に失敗をして目立ちたくないということが、治療を開始するための大きな動機づけになっていることが考えられる。このときに、「症状を克服すれば、いろいろなことが達成できる」ことを伝えて

も、治療に対する動機づけは高まりにくいだろう。

だが、「悪いことが起こるのを避けたい」という回避の目標をいつまでも掲げ続けることも、望ましい治療のありかたではない。対人不安への対処を学ぶ中で、むしろ健康な賞賛獲得欲求が育ち、達成を喜べるようになることこそ、セルフ・コントロールへの第一歩となる。失敗回避の動機づけをうまく利用しながら、ポジティブな強化が受けられるような状況に挑戦するよう少しずつ導いていくことが、治療者には求められる。

本研究の限界として、対象者が大学生に限られた点が挙げられる。対人不安とSADの間には連続性が仮定でき、質的な違いはないことが確認されているが（例えばTurner et al., 1986）、臨床場面への応用可能性を考えると、この結果がSAD患者においても再現されるかを検討する必要がある。また、菅原（1998）は、賞賛獲得欲求は対人不安とは無相関であるものの、社会的な場面の回避を示す対人消極傾向とは負の相関を示すことを見出している。「対人不安」という主観的な感情体験だけでなく、行動評定などの客観的指標との関連性についても検討することで、社会的場面における自己呈示欲求の影響性が、今後さらに明確になることが期待される。

謝辞

本研究の実施にあたっては、2009年度学部卒業生の大武祥子さんに多大なご協力をいただきました。記して感謝の意を表します。

【引用文献】

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 4th ed., text revision. Washington, DC: Author.
- Davidson, J. R. T., Hughes, D. L., George, L. K., & Blazer, D. G. (1993). The epidemiology of social phobia: Findings from the Duke epidemiological catchment area study. *Psychological Medicine*, *23*, 709-718.
- 金井嘉宏・笹川智子・陳峻雯・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二（2004）. Social Phobia Scaleと

Social Interaction Anxiety Scale日本語版の開発
心身医学, *44*, 841-850.

- 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, *11*, 86-98.
- Leary, M. R. (1983). *Understanding social anxiety*. Beverly Hills, CA: Sage Publications, Inc.
- （リアリイ, M. R. 生和秀敏（監訳）（1990）. 対人不安 北大路書房）
- Safren, S. A., Heimberg, R. G., Brown, E. J., & Holle, C. (1997). Quality of life in social phobia. *Depression and Anxiety*, *4*, 126-133.
- 佐々木淳・菅原健介・丹野義彦（2001）. 対人不安における自己呈示欲求について—賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との比較から— 性格心理学研究, *9*, 142-143.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, *92*, 641-669.
- 清水真由美（2007）. 対人状況別の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が対人不安に及ぼす影響 日本パーソナリティ心理学会第16回大会発表論文集, 136-137.
- Stein, M. B., & Kean, Y. M. (2000). Disability and quality of life in social phobia: Epidemiologic findings. *American Journal of Psychiatry*, *157*, 1606-1613.
- 菅原健介（1986）. 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自己意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, *57*, 134-140.
- 菅原健介（1998）. シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向 性格心理学研究, *7*, 22-32.
- Turner, S. M., Beidel, D. C., & Larkin, K. T. (1986). Situational determinants of social anxiety in clinic and nonclinic samples: Physiological and cognitive correlates. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *54*, 523-527.
- 山下格（1970）. 対人恐怖について 精神医学, *12*, 5-14.

The effects of praise-seeking and rejection avoidance motivations on social anxiety

Satoko Sasagawa Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Hironobu Inoguchi Mejiro University, Graduate School of Psychology

Mejiro Journal of Psychology, 2012 vol.8

[Abstract]

The purpose of the present study was to examine the effects of praise-seeking and rejection avoidance motivations on social anxiety from the scope of the self-presentation model by Schlenker & Leary (1982). Two hundred and seven private university students in Tokyo took part in the study. Participants were administered a questionnaire package consisting of the Social Phobia Scale, Social Interaction Anxiety Scale, and self-presentation scales. Social anxiety and rejection avoidance was consistently correlated with each other, but no significant relationship was found between social anxiety and praise-seeking motivation. These findings indicated that self-presentational motivation as discussed in the Schlenker & Leary (1982) model pertain to a person hoping to avoid bad impressions rather than making good ones. Implications for future clinical practices were discussed.

keywords : praise-seeking, rejection avoidance, social anxiety, self-presentation